

末吉

れた。父は酒田町の商家富樫長兵衛の次男

は近郊鶴渡川原村(いまは酒田市内)の農家岩本金吾の次女であった。祖父(金藏)と祖母(志賀)の間に子供がなかつたので、

父を養食子夫婦として迎えたのである。

青木林學

から来た

の里江

年譜

明治十八年(西歴一八八五年)

三月十四日、山形県酒田町、~~舞場西~~向屋女生

父は~~末吉~~、母は里江、祖父は金藏、祖母は志賀

明治十九年(一八八六年) 一歳

(年齢は誕生日以後の満年齢を示す)

父を失った。
後に、再婚した母は分家となり、
父も失った。
後に、再婚した母は分家となり、

は祖父母の許で成人し、
成人した。

明治三十年(一八九七) 十二歳

小学校高等四年のころ、化学実験に没頭し、倍々

代敷と英法を学んだ。

明治三十一年(一八九八) 十三歳

祖父の許可を得て、
留守中に、
その許可を得た。

明治三十五年(一九〇二) 十七歳
祖父の許可を得ず、
中学を半途にして上
京し、東京物理学校に入学した。

明治三十八年(一九〇五) 二十歳
東京物理学校卒業し、
家督を相続した。
東京帝

明治三十九年(一九〇六) 二十一歳
口大物理和化学(理)科に入学した。
その前年

祖父の病気のため、
大学を退学し、
郷里に帰り、
家督を

祖父の病気のため、
大学を退学し、
郷里に帰り、
家督を

養女として妹のよひん育てられ
幼少から許嫁、青森県人

この年

井上三子
仁助の三女

あつた。藤巻しほと結婚した。

明治四十年 (一九〇七) 二十二歳

昨年(一九〇六)から林鶴一先生の指導を受け、
この年、家業の傍ら、数学と研究に専心した。

林鶴一先生の指導を受け、この年長男に長美が生まれた。

明治四十一年 (一九〇八) 二十三歳

この年から東京教員講習会に入り論文を発表

を始めた。教学上ではドイツの

明治四十二年 (一九〇九) 二十四歳

商用のため新婚に三カ月滞留したが、その間に、教

学を専攻と決心した。この間は封建的な

家制度として生活と学問研究との矛盾を
青春時代の危機であった。

著述
フェリックス・クライン
とノールウェーの
ソーフス・リーから
ゆつとも大きな影響を受けた。

教授

林鶴一先生も
主任として
数学教室の
活動務めし、
また

新設の

明治四十三年（一九一〇）

二十五歳

~~東京~~ ~~校~~ ~~東京~~ 物理学校 講師

を依嘱され、

上京した。

明治四十四年（一九一一）

二十六歳

東北帝国大学 理科大学 助手と専攻し、

七共ニ仙台に移った。二小より六年間、東北

女子教壇の編集を手付った。

仙台では林鶴

十、藤原松三郎、中村中彦、掛谷富一、石原純、

由良丸

明治四十五年（一九一二） 二十七歳

祖父を失った。から以上がの準備を始めた。

~~東京~~ 知里

この年

最初の著書

(林鶴一と王共著)

『級お概論』を出版した。

大正二年 (一九一三) 二十八歳

『ルーシェ・コレパルース 初等算何ろ』第一巻を出版した。

大正三年 (一九一四) 二十九歳

この春で郷里から、~~東京~~ 上野が、~~東京~~ 終わった。
『サーモン』

折友何ろを刊行した。

大正四年 (一九一五) 三十歳

この年か、^{助手のままで}東北大学の授業を嘱託された。『トニー』

コレパルース 初等算何ろ 第二巻を出版した。

大正五年 (一九一六) 三十一歳

論文

保存力増へおけの経路によつて、文部省から理学博士の學位を受けた。

大正六年（一九一七）三十二歳

新設の 大正 理化学研究所の招が、大正に轉じて、

研究の傍から、
医科大學豫科
の講義を
せられた。
西田所（今の池田市）に住んだ。およそ二十九歳から三十

西田 歳 西田が、いわば本格的な数学の論文を、

大正九年（一九二〇）三十五歳
微分幾何学、直線幾何学および関幾何学、
力学、近似函数等を

フランスの 数学、一月ばかりの着いて、ハンテオンの側へ住んだ。

ストラスブールの 国際数学者会に出席した。ソルボンヌ大學

とコレージュ・ド・フランスに入して、アケマル、ボレル、ラン

ジュヴァンの講義、またはゼミナールに出席した。

大正十年（一九二一）三十五歳

相對性理論の研究した。十一月マンローヌを出版、帰りの

途に病ついた。

大正十一年（一九二二）三十七歳

一月に帰国して、研究の~~大改訂~~大改訂和たる後刊の講義を

ほいめた。に任事し、~~また~~また

大正十三年（一九二四）三十九歳

『教育教育の根本的~~な~~』を出版した。この前後から

よういになった。数学教育の~~な~~数学の普及の問題について、考えをし著作する

カルタン、

↑大正十四年（一九二五）四十歳

塩見理^死学研文診長を命じられた。この秋から肺

内淋巴腺去^のため、満二年尚ほじ療養良生

括をつづけた。その内、大正十四年秋、肺病を

した。^{には}臥床する日が多くなった。^{が、}健康が衰^えてき^て冬期

~~大正十三年~~（一九二四）四十歳
健康よりやく恢復し、『カビヨリ 初尋ねる史』（井出）

下柄内氏^の共注）を~~出版~~し、^{出版}数学史の興衰を~~出版~~し、^{よせる}よる

~~大正十三年~~（一九二四）

昭和四年（一九二九） 四十四歳

祖母を失った。

数学史の研究を

始めたし。

の算術

~~の算術~~

（聖多馬の『

聖多馬の『聖多馬の算術』

なりの

論文を~~中心~~にした。

昭和六年（一九三二）

四十六歳

正規の題目として、

廣島文理科大学で一年間、

数学史・数学教育史を

講義した。

昭和七年（一九三三）

四十七歳

大阪帝国大学理学部が

~~新設~~

理学部

講師となった

た。『数学教育史』

出版

唯物論研究会の

創設に参加し、また

『日本資本主義発達史講座』

数学史の一章を書いた。

中央公論

科学を

フアミズム
から守るため

昭和八年（一九三三）四十八歳

この年から和算の『中国数学史』の研究を仕
じめた。

昭和十年（一九三五）五十歳

『数学史研究』第一集刊行。この前年から、概合

をせらるゝは、フアミズム防止のため、盡力した。

昭和十一年（一九三六）五十一歳

『自然科学者の任務』を著し、~~その~~ 空のせた。

昭和十二年（一九三七）五十二歳

孫欣一生子。塩見理化学研究所長を辞し、東京物産

~~島中紙~~

通りである。

移った。

（大阪帝國大学の講義は、春秋の二回）

行ったことした。

『科学的精神と数学教育』

昭和十三年

(一九三八)

五十三歳

孫純二生る。

『家計の数学』

昭和十四年

(一九三九)

五十四歳

二月急性肺炎にかかった。

国民学校協会が生れ、

会長 ~~および~~ 理事

今日

昭和十五年

(一九四〇)

五十五歳

満洲国民生部の教科書編纂顧問となる(翌年解職)。

本の数『計算図表』刊行。『秋』東京物理学校の理事

長および幹事となり、

女学生に入った。

まとめ

（これは十三年後の）

おけ、近代的
数学の成立
過程 / 明治

昭和十六年 (一九四一) 五十六歳

孫信三生る。日本科学史学会成立し、顧問也

なる。民生生活協会理事と ~~院長~~ 院長とした女子

~~民生生活~~ 民生生活学院 (島中雄作氏 ~~院長~~ 院長とした女子

の特色ある学校) の経営に参画した。時局板 ~~田内わく~~

昭和十七年 (一九四二) 五十七歳

~~2~~の年熱ある (病名不明) の病のため、慶應病院に入院

したが、乙水から後、健康は非常に衰えてきた。日本

昭和十八年 (一九四三) 五十八歳

時代の数学 ~~が出版された~~ ~~になった~~

昨年書きあげた

この年内に

私の経営方針は、同窓の反対者が多かったため、改選期に

改選に空けた
教員内定の直前
どうせんか
陸軍當局

大め
だといわゆる

B 29
東龍が
あつて

大阪大学の講師をやめた。東京物理学校理事

幹事をやめてしまった。敗戦の色濃

くちやんつ小、筆を執る機会を失った。それは

昭和十九年（一九四四）五十九歳

車と孫三人で酒田市に疎南した。

昭和二十年（一九四五）六十歳

六月酒田の港湾に機雷が投げられた。七月に市では疎南の準備を行なった。疎南

戦後酒田市へ戻り、年末東京の自宅へ帰った。疎南

の年母を失った。

昭和二十一年（一九四六）六十一歳

この春休みの健康を以て、明治数
学史の基礎工事
を書きあげた。

十月末までに

に擴大

十月協会の席上

び、「現在ますます

深まりつつある日

本の危機機に

際し、及動文化

の政教をどう

くだりて、ひまに正

しい意味での

民本主義文化

革新命を遂行

する目標をう下

す。いとはった。

種南中の無理がたまった

のであろうか

この病氣中、まだ吐血しない前に、日本放
送協会会長に推薦されたが、固く辞した。

民主主義 科学者協会 成立し、会長に押された。

際理由子生る。胃潰瘍にかかった。『科学の指

標』刊行。

また戦争調査局参典

にされたが、この間も全く解散となった。

昭和二十二年 (一九四七) 六十二歳

昭和二十二年

二度も急性肺炎にかかった。

民主主義文化連

盟の常任委員長に押された。『刷新委員

会』を組織した。

昭和二十三年 (一九四八) 六十三歳

この年、また急性肺炎にかか。『日本科学史

研究会』の会長に押された。『数学史研究第二集』、『数学

(解題)

および

昨時の秋から
臥床していたが、

若者の記録』を出版した。

昭和二十四年（一九四九）六十四歳

文化連盟の責任ある地位を退いた。東京理科大学

（イ）の物理学校）の理事
およが 同窓会長となった。

昭和二十五年（一九五〇）六十五歳

また半年も病臥した。民主主義者協会の会長を辞した。

昭和二十六年（一九五一）六十六歳
『数学者の回想』が刊行された。この年はついに

一度も電車に乗らなかつた。ほとんど弱っていた。身体が

『二十世紀の数学教育』を脱稿中、半年も病臥し、その行力

じより、初尋ある史改修をほいめた。この

年は、よじ三度電車に
訂の仕る
平和憲法擁護のためん微力を
つうす覚悟

床にいた
にええい
未刊

つてしまった。

伊東
伊三山